

## 秋号

## 民話を楽しくもつ

## 民話 ゆうき むじな聖教

文・結城市教育委員会  
挿絵・佐々木 明



弘経寺と呼ぶ寺は、茨城には鬼怒川沿いの結城市や水海道市飯沼、そして取手市の三寺があります。

ところで水海道飯沼の弘経寺は、結城と同じく檀林だんりんといい、浄土宗の学問所であり、よその土地からもたくさんのお坊さんがこの寺に集まり、修行を積んでいました。

二代目の住職

良暁上人よしのの時のことです。多くの修行僧の中のひとりに良全という、すぐれたお坊さんがいました。



しかし、この良全は、日頃から、その行いや様子が普通の人でないことを、良暁上人はうすうす感じていました。

ある夏の日  
のことでした。  
その日、お坊さんたちは、寺の境内ですもう大会をしました。

「はっけよい、のこった、のこった、のこったのこったのこった良全の勝ち」良全は人なみ以上の力を出して大活躍し、とつとつ優勝してしまいました。部屋へ戻るとさすがの良全も、くたくたにくたびれてしまい、高いびきをかいて寝込んでしまいました。



おもしろい話を  
してあげよう。  
のこーし勝た……

じいちゃん、  
どんなお話を  
あなたの？



ところが、そのいびきときたら「グウォ、グウォ」とこの世のものと思えないほどの凄まじい音でした。不思議に思っって良暁上人は、そつと良全の部屋のふすまを開けてのぞいて見ました。するとそこには良全の姿はなく、大きなむじなが一匹大の字になって寝ていました。「ワァッ」



と驚く良暁上人の声でめを覚ました大むじなは、良全の姿に戻り「アッ」とそこにひれ伏しました。

日頃から、良全のことをおかしく思っていた上人は

たいへん怒りました。

「私は、飯

沼の裏山に

住んでいまし

たが、朝夕ご住

職のお経を聞いてい

るうちに、どうしても仏法

を学びたくなり、良全に化けて修行

をしていました。ほんとうに申し訳

ありません。



お詫びに私が修行によって得た秘術、来迎三尊仏の姿をお見せいたしました。

しかし、それを見ても決して拝んだり

しないで下さい」

と言うと、良暁上人の前に金色に

輝く阿彌陀三尊仏が現れました。

あたり一面に紫の雲がたなび

き、そのあまりのこうこうしさ

に、良暁上人は良全の言葉も忘

れて、思わず「なみあむだぶつ」

と手を合わせて拝んでしまいま

した。

すると、阿彌陀三尊仏はかき消さ

れ、真っ暗な空から一筋の稲妻が

地面めがけて走りました。

雷鳴が轟き、

「ガラガラビシャン」

と大きな音と共に、雷が落ち、そこには大

むじなが死んでいました。

良全との約束を破り

大むじなを死なせてし

まった良暁上人は、かわいそ

うに思い飯沼の山に手厚く葬り

ました。

その晩のことです。

良暁上人の夢枕にむじなが現れ、

「私の持ち物の中に木の葉教が

あります。それを寺の宝として

大切にして下さい。木の葉教が

あるかぎり、未来永劫この寺を

守りましょう。しかし、木の葉教

は飯沼の住職以外誰にも見せて

はいけません」と言ったのです。

夢から覚めた良暁上人は、良全

の机の上ありがたい経文を見

つけました。それからはむじな

が書いた聖教、木の葉教は寺の

宝として、大切に保存されてい

ました。



九代目の住職存把上人は、飯沼が戦場となり、戦禍をのがれるため鬼怒川をさかのぼり、結城の北中島に庵をたて身を寄せました。

そのことを知った結城十八代城主秀康公は、幼くして亡くなった松姫の菩提寺として、存把上人に結城弘経寺を開山させました。その時「むじな聖教」も結城弘経寺に持ち込まれ、今もそのまま残っているそうです。

でも「飯沼の住職以外見てはいけない」というむじなの言葉通り、箱の奥深く人目にふれず、静かに寺を守っているというのです。

